

## 2019 年度 Educational Support「教育助成」公募詳細

### 公募テーマ:更年期障害の診断・治療の質向上と普及

|    |   |
|----|---|
| 目的 | <p>更年期医療に関わる方々が更年期障害の病態及び最新の治療オプションを理解し、患者さんへ最適な治療を届けるため、医療関係者の知識・スキル向上を目的とした、以下の教育活動に対し支援を行います。</p> <ul style="list-style-type: none"><li>■ 疾患概念の理解向上</li><li>■ 診断方法・治療方法の理解向上と普及</li><li>■ 治療薬のリスクとベネフィットの理解向上</li><li>■ 更年期障害治療における専門医と非専門医の連携推進</li></ul>   |
| 背景 | <p>更年期障害とは、「閉経を挟んだ約 10 年間に、卵巣機能の低下、すなわち女性ホルモンの減少によって現れる多種多様な症状の中で、日常生活に支障をきたす病態」を意味します。更年期女性の 8 割程度は何らかの不調を経験し、そのうちの 1 割は長期化・重症化により QOL が著しく低下すると言われてしています<sup>1)</sup>。中でもホットフラッシュ(ほてり・のぼせ)は更年期障害の代表的な症状です。自律神経の働きが乱れ、血管の収縮と拡張のコントロールができなくなることが原因とされていますが、詳しい発生機序は明らかになっていません<sup>2)</sup>。</p> <p>ある調査によると、更年期の症状に悩む人の約半数は何も対処せず、病院に行くのは 1 割に満たないという結果でした<sup>3)</sup>。更年期障害の症状は多岐に渡り個人差が大きいいため、自己判断せず、婦人科または女性外来を受診し、専門家による適切な検査、治療を受ける必要があります。また、更年期様症状を表す甲状腺機能異常(橋本病、バセドウ病)や、全身倦怠感を呈する肝機能障害、血圧異常、関節リウマチ、シェーグレン症候群など、他の疾患との鑑別診断も重要です<sup>4)</sup>。</p> <p>治療は主に、薬物療法であるホルモン補充療法(HRT)と漢方薬、抗うつ薬の 3 種類で、併用する場合があります。HRT は、有効性のエビデンスレベルが高く、世界の更年期医療の第一選択として先進国を中心に、多くの女性に使用されています。2002 年、WHI (Woman's health Initiative) の中間報告において、HRT のリスクが報告されたことによる懸念の声が高まりましたが、その後、2012 年に、北米閉経学会で HRT の安全性に関する提言が発表され、考慮すべき点が明らかになりました<sup>5)</sup>。わが国では日本産科婦人科学会、日本女性医学学会が中心となり HRT ガイドラインを発刊<sup>6)</sup>するなど、安全かつ安心な HRT の普及に尽力されてきましたが、その普及率が未だに低いことが課題となっています<sup>7)</sup>。一方で、漢方薬は副作用が少なく治療に広く用いられていますが<sup>8)</sup>、その薬効をめぐっては西洋医学と東洋医学それぞれの立場で意見があり、そのギャップをどう埋めるかが大きな課題となっています。質の高い治療を行うためには、更年期障害の正しい認識と正確な診断、さらには薬物療法のリスクとベネフィットのバランスを適切に評価し、患者個別のリスク管理を行うことが必要不可欠です。</p> |

|        |   |
|--------|---|
|        | <p>わが国では男女ともに平均寿命が伸び続けており<sup>9)</sup>、高齢化社会において今後、更年期医療の需要は増していくと予想されます。にもかかわらず、実際の医療現場では適切でない診療科を受診してしまうことで診断が遅れるケースや、地域によっては女性外来が不足していて満足な治療を受けられない問題も生じています。さらには、社会の変化により、治療を必要としながらも働き続ける女性が増えているのに対し、具体的な対策が追いついていないとも言われています。</p> <p>かかりつけ医(非専門医)と専門医の連携体制を築くこと、また、更年期医療、女性のヘルスケアに関する適切な教育、指導者の育成をコメディカルと連携して進める<sup>10)</sup>ことで、更年期女性の QOL 向上に大きく貢献できると期待しています。</p>  |
| 活動の形式  | イベント、セミナー、ワークショップ、オンラインコース、印刷物 等  |
| 活動の対象者 | 専門医、非専門医、薬剤師、助産師、看護師等、更年期障害治療に携わる医療関係者  |
| 参照文献等  | <ol style="list-style-type: none"> <li>1) Roberts H, Hickey M. Maturitas. 2016;Apr;86:53-8.</li> <li>2) 石毛敦:更年期症状における漢方薬の役割. 医療ガバナンス学会, 2016</li> <li>3) 更年期の実態調査 2017 <a href="https://prtimes.jp/a/?f=d8329-20171212-7609.pdf">https://prtimes.jp/a/?f=d8329-20171212-7609.pdf</a></li> <li>4) 岩本一朗、堂地勉:更年期の不定愁訴とその対応. 産婦人科治療 100(4):370-376, 2010</li> <li>5) 昭和学士会雑誌 77(4): 367-373, 2017</li> <li>6) ホルモン補充療法ガイドライン 2017 年度版, 日本産科婦人科学会・日本女性医学学会編</li> <li>7) 峯村昌子 更年期と加齢のヘルスケア 2017;16(1):164-168</li> <li>8) 高松 潔、小川真理子 産科と婦人科 2014;81(11)1355-1361</li> <li>9) 厚生労働省, 平成 29 年簡易生命表 <a href="https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/life/life17/index.html">https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/life/life17/index.html</a></li> <li>10) Ehttram N et al. Menopause doi: 10.1097/GME.0000000000001270</li> </ol> |